

幼児のパーソナリティ形成におよぼす父親の影響

野 島 正 也

Significance of Fatherhood on Child's Personality Development

Masaya Nojima

The purpose of this paper is to overview some opinions and theories about significance of fatherhood on personality development of child, to point up some problems of that, and to study and discuss the problems in all its bearings.

I had been attending a society for the study of Freud, S for two years, and there, I had been studying under the guidance of psychiatrist, Dr. Kawai, H. I owe the result of this paper to him and other members.

This paper is focused on the full understanding of the concept of "Edipus complex" given by Freud.

I

結婚した男女のあいだに子どもが生まれたとき、母親と子どもの親子関係は明白なのに、父親と子どもの関係は必ずしも確定的ではないという。出生の秘密をめぐる、小説やテレビドラマではさまざまなストーリーの展開がみられるが、この親子関係の不確かさを、わが身、わが子のこととして考えれば、内心なんとなく頼りない気持ちにもなる。父親とすれば、母親が授乳などで、子どもとの親密な関係を独占している事実には、いささかの嫉妬すらおぼえたこともある。

私的な所感はさておき、乳児期の子どもにおよぼす、母親の影響の優位性はなんともうごかしがたい。ちなみに、シャッフーらの研究によると、母子の不離の関係がとくにいちじるしい期間は、出生後1年だという(1)。

生まれてから1年頃までの乳児を「子宮外胎児」とよぶことがある(2)。ヒトの脳の発達はいちじるしく進化し、頭が大きくなったので、あまり成長しないうちに母体から出ないと難産になる危険がある。そこで、チ

ンパンジーなどなら、まだ胎内で成長しつづけるはずの期間を、ヒトの場合、約1年も短縮して胎外に出ってしまったと考えられる。さききのべた母子一体の関係は、この進化論的早産の説明と、期間の上で符合するものである。

出生後(とりわけ第一子の出生後)の約1年間について、わたしは、父親の、子への影響よりも、むしろ、子の、父親への影響に着目したい。つまり、「父親」が社会的にどのようにつくられていかに着目したい。父親は、出産時の身体的苦しみを経験していない。母親は、出産の経験を大きなはずみにして、「母親」の役割をすすんで自己規定してゆく。いや、「母親」への心理的な移行は、妊娠時より徐々にすすめられたというべきだろうか。一方、父親が「父親」として自覚されるには、とくに、ある種の社会的装置が必要である。新生児が誕生した家族に対する周囲の人の祝福、命名、おしめの取り替えなどの育児体験等とおして、しだいに「父親」ができあがっていくのである。

1歳をこえた子どもについても、全体的に
いえば、母親への愛着の方が父親へのそれよ
りも強い。それは、父親と母親の生理的相違
にもとづくというよりも、育児の大半を母親
がうけもつという社会的慣習に由来するもの
とおもわれる。コトルチャック (M. Kotlchuck)
がアメリカ都市部でおこなった調査によれば、
父親全体の75%が育児の習慣をもって
おらず、また、43%がまったくおしめを取
り替えたことがなかったという(3)。
わが国の場合も、いくつかの育児調査をつけ
あわせてみると、同様の傾向がよみとれる。

ところで、私的な経験であるが、1年ほど
前、2歳になるわが子をつれて、地元の保健
所に予防接種にいった。会場には、ざっと、
七、八十の親子のカップルがいたが、わたしたち
父子を唯一の例外として、すべて母親と子の
組み合わせであった。父親の参加がないこと
にやや奇異な印象をうけた。首都近郊の人口
24万人の都市でのことである。

ところで、パーソンズは、家族集団が幼年
期の子どもの人格形成に、基本的に重要な役割
をはたすことに着目して、それを「養育家族」
(family of orientation) ととらえた(4)。

またさらに、養育の様式は、その社会の文化
による拘束 (culture bound) を受けるともい
っている。口唇をつうじて乳児が母親への依
存を保ち、生命の安定をえていた時期 (およ
そ9か月～1年) をすぎてから、親を性的愛
関心でとらえるようになる時期の中間にある
時期 (およそ2歳～3歳) は、母子一体性が
くずれて、母親と父親の両方への依存の可能
性がでてくる時期に相当する。この時期に、
乳児にひきつづいて、母親への依存が優位に
たつかどうかは、その社会の文化、あるいは
個別の家庭の事情によるところが大きい。

文化との関連でいえば、わが国の育児慣習
や米欧のそれは、父親=就労、母親=育児・
家事という役割分担が支配的である。しかし
そうした分担が全てではない。たとえば、メ
ラネシア諸島のレス村では、そのような慣習
はない(5)。マクスウェル (M. Maxwell West)

によれば、村民は魚釣りや芋栽培で暮らしを
たてているが、父親は乳幼児のめんどうをし
じゅうみており、母親は畑仕事や料理でいそ
がしい。

一方、個別の家庭の事情でいえば、子ども
の幼い時期に父母の離別または母親の死別で
父子家庭となった場合、父親自身が育児の主
な担い手となることもある。

こうして、父親が家庭でどれだけ育児の役
割を果たすかは、広くは社会制度、狭くは家庭
の個別的事情のなかで決まってくるものであ
る。

さて、さきほどのパーソンズは、子どもが
自律性を身につけていくときの基本的方向を、
二つさししめした。一つは「道具性」 (inst-
rumentality) の獲得、他の一つは「表出性」
(expressiveness) の獲得である。この両者は、
もともと、親が多かれ少なかれもっていたも
のである。端的に言えば、子どもからみて親
の道具的役割とは、「わたしを世話してくれる
こと」であり、表出的役割とは、「わたしを愛
してくれること」である。子どもは、毎日の
生活で、親がしてくれる種々の世話をとおし
て、それらの役割を自らの内部に取り込んで
ゆく。その結果、子どもは、自分自身の世話
ができるようになり、自らを愛するようにな
る。その場合、幼児の人格形成にとってとく
にだいじなのは、結果的に、自分の世話や自
分への愛情をどれだけ親に依存し、また、ど
れだけ親から自律することになったか、そこ
に適度のバランスが保たれているかというこ
とである。もし、そのバランスを欠き、子ど
もが過度に依存的ならば、他人志向の「甘っ
たれっ子」の態度が現れる。逆に、役割の取
得がゆきすぎて、過度に自律の方向にかたむ
けば、情愛への切望は無意識のうちに抑圧さ
れ、表面的には、他者の重要性を極小化した
ナルシシズム的・自律的行動が現れる。

II

個人差はもちろんであるが、概して3歳ご
から5歳ごろのあいだの時期は、子どもの人

格のうちで、道徳性、規範性がとくに発達する時期である。フロイト (S. Freud) は、子どもが両親に対していただく情愛と憎しみをエディプス・コンプレックス (Edipus complex) とよび、人格の方向づけに基本的な役割を果たすことを説いた。その時期は、ほぼ3歳から5歳に相当する。フロイトは、このエディプス・コンプレックスの感情を克服する過程で、何がいけなくて、何がよいのかの判断、すなわち「良心」(道徳意識)の中核部分が形成されるとした(6)。エディプス・コンプレックスとは、周知のように、父親をそれとは知らずに殺害し、自分の母親と結婚したギリシャ神話のエディプス王にちなんでフロイトがつくった用語である。彼は、神話を象徴的に採用することによって、個人や時代をこえた人間の普遍的性格を強調しようとした。すなわち、フロイトは、「人間として生まれてきたものは誰でも、エディプス・コンプレックスを克服しなければならないという課題を与えられる」(7、傍点筆者)という。幼児は両親を性的存在として見、男の子は、母親への情愛と父親への畏怖、女の子は、父親への情愛と母親への嫉妬を経験する(フロイトは、親子の異性愛的結びつきと同時に、同性の親子の親和・恋着が現実にあることにも言及している)。子どもはこの段階で情愛をさしむけるべき対象を特定する能力を得ることになる。男の子は、父親との同一視によって、母親に対して優しい態度がとれるようになる。

エディプス・コンプレックスは、また、父親または母親に対して、憧れと畏れの相反する両面の態度としてあらわされ、子ども自身、内面のジレンマを経験する(8)。男の子ならば「おまえは父のようであらねばならない」という声と、「おまえが父のようであることはゆるされない」という声である。後者は、父親の特権になっている行動や態度の禁止を意味している。そこで、その男の子は、無意識の罪悪感をともないながらも、妨害者としての父親の力能を自らの内面にとりこみ、現実の父親に対して自らを補強することで、このジ

レンマをのりきってゆく。ここに強固な「良心」がつくり出されることになる。「良心」は、自らのあるべき理想をさししめすのみでなく、やっではいけないことの内容も同時に示すものである。フロイトは、後者を強調して、「良心とは、われわれのうちにある一定の願望欲動の拒否を内面的に知覚することだ」(9)とのべている。

こうした心理機制は、女の子についても同様に生じる(10)。パーソンズは、人形をつかったママゴト遊びの観察から興味ある事実を発見している。彼によれば、よく見うけるママゴトのパターンでは、女の子自身は母親の役割をとり、人形が子どもの役割で、父親にわりあてられた人形がないことが多いという。彼は、この事実をつぎのように説明する。もし父親の人形があれば、女の子自身は妻の役割をやらざるをえないだろうが、それをやることは、現実の母親の役割と競合し、これを奪うことになる。彼女の内面の良心は、無意識のうちにこの考えを断念させたのであろう。

ちなみに、男の子の遊びでは、運転手、飛行士、警官など、日頃よく見かける職種を感覚的にとらえ、それらの職務上の役割を模倣することが多い。これを女の子がする家事労働の模倣にくらべると、男の子の場合、役割の選択肢はより広範囲におよんでいるといえる。彼らは、これらの遊びをとおして身体的有能さを強調し、父親の役割に近づこうとする。男の子の選ぶ役割が多様であることの原因としては、産業化・都市化の動きのなかで、父親の職業労働を身近に観察することがきわめてまれになり、父親の仕事ぶりをモデルにすることがいっそう困難になっている事情を挙げておきたい。

さて、エディプス・コンプレックスは、近親相姦的願望をその内に含むもので、それは、現実の社会で成就されえず、もともと叶えられない願望であることがわかることによって消滅してゆく。しかし、この時期に獲得され、内面化された道徳意識・規範のありようは、子どものその後の性別役割の遂行や思春期の

異性選好に基本的な影響をもつことになる。

フロイトは、このコンプレクス感情の消滅をこう表現する。「エディプス王より幸いなことに、わたしたちは、そのうちに精神神経症にならない限りにおいて、わたしたちの性的衝動を母親からうまく引き離し、また、父親に対する嫉妬を忘れるようになっている」(傍点筆者)。精神神経症患者の病状については、精神科医師の症例報告を傾聴するのがいちばんだが、ここでは、フロイトがあげた、子の、父親に対する強すぎる恋着に起因する子どものうその例を一つだけひいておきたい。フロイトは、この例をつうじて、「しつけのよい子どもの一連のうそは、ある特別な意味をもち、教育者を立腹させるかわりに反省させるものである」(11)と、一般の人々の注意を喚起している。話はつぎのとおりである。

当時10歳の彼女は、まじめな、真実を愛する、よい娘であった。できごとは小学校でおこった。図画の時間に何も道具を使わずに円を描くよう課せられたことがあった。しかし彼女はコンパスを使い、いともたやすく完全な円を描きあげ、それを誇らしげに隣りの女の子に見せた。先生が近づいてきて、この少女の自慢をききとがめ、円の線にコンパスを使った跡を見つけ、彼女に問いただした。しかし彼女は執拗に否定しつづけ、罪を確認させるようないかなる証拠もしめそうとせず、反抗的に黙りこみ通した。先生はこのことについて父親と相談し、この少女がその他の点では正直であるのに免じて、二人はこの過ちをことさらとがめだてないことに決めた。

フロイトは、このできごとの意味をこう分析した。彼女はきょうだい5人の長女であった。この少女にはごく早い時期から父親に対する普通以上に強い愛着が生じていた。この父親への愛着のために彼女が成熟期に達したとき、彼女の人生の幸福は挫折することになる。彼女が成長するにつれて、愛する父親は彼女が思っていたほどえらくないことに気づいたに違いない。父親は経済的困窮と戦わねばならなかったし、彼女が考えていたほど力

強くもなかった。しかし彼女の理想像をこのように割引いて考えることに彼女は同意できなかった。彼女は女らしく、自分のすべての名誉心を愛する男性にかけていたので、世間に対して父親を支持するということが彼女にとってはもっとも強力な動機となった。父親は優れた精図工で、日ごろからその才能に、子どもたちは魅惑され驚歎させられていた。そこで彼女は、父親のかわりになって小学校である円を描いたのである。それは不正手段を用いることによつてのみ描くことができた。「おとうさんが描けるものを見てください」と彼女は自慢したかったにちがいない。父親への強すぎる愛情と結びついた罪の意識が、うそをつくことでその表現手段を見いだしたのである。それはおそらく、隠された近親相姦的な愛情の告白にほかならなかつたらう。

フロイトは、子どもの生活におけるこのようなエピソードを軽視してはならないこと、このような過失から後年の非道徳的な性格が芽ばえると断定するとしたら、それは大きな誤りを犯すと警告している(12)。

こうして、フロイト以前、幼児期の人格形成について、人々は實際体験の感触から、母親の影響が中心問題で、父親の影響は副次的だと考えていたが、フロイトは、これに反して、父親に、子どもの人格形成上、独自の役割をわりあてたのだ。このことは、まさに画期的なことであった。

ところで、父親の、子どもへの影響は、概して、フロイトが示した公準的性格をもつとしても、現実の個々の父親についてみれば、彼らは、種々の下位文化(権威主義的な父親、愛情深い父親……)をもっており、それに応じて子どもの人格形成も影響を余儀なくされる。そこでこの節のさいごに、父親の下位文化との関連で、いくつかの実証的研究の結果を紹介しておきたい(13)。

ホフマン(M. Hoffman)は、子どもの世話に積極的な父親のばあい、愛他的で寛容な子どもが育つという一般的傾向を明らかにした。また、クーパースミス(S. Cooper-

smith) らは、愛情深い父親の場合、その子に自尊の感情が大きく育つことを報告している。また、Bronfenbrenner (U. Bronfenbrenner) は、父親の権威的態度は、男の子の場合には責任感の発達を促進させるが、女の子の場合にはむしろ、その発達を妨害していると結論づけている。さらに Altucher (N. Altucher) は、父親の禁止の行為は、しばしば攻撃的男性のモデルとなり、男の子の「男らしさ」を助長しやすい傾向があるという研究結果をだしている。

III

フロイトは、子どもの正常な人格の発達には父親の存在が決定的に重要であることを説いたが、わが国の実際の家族構成をみると、生別・死別により父親が不在の家族は少なからず存在する。母子世帯の実数は全国で約63万人。これは総世帯数の1.9%にあたり、微増の傾向にある。なお、母子世帯のうち年齢にみたない子をかかえる世帯は約2割である。

では、父親がいないことによる、子どもの人格への影響はどんなものだろうか。これについては、さまざまな実証的研究がすすめられているが、わたしはそれらの知見をわたしなりにつなぎ合わせる努力をしてみたが、なお、求めるべき解答が断片的である印象をもつ。この種の研究の困難さは、およそつぎの理由によるとおもわれる。すなわち、父親がいないという場合でも、不在の理由、不在の長さ、不在を子どもが経験する年齢、子どもの性別・知能・体格、きょうだいの数、父親の代理者の有無、母子の人間関係など、きわめて多様な要因が子どもへの影響に微妙に関連しているのだから、因果関係を全体的に明らかにすることが至難なのである。ともあれ、現段階でそれらの研究のいくつかをみておきたい(14)。

シアーズ(R. Sears) らによれば、一般に、父親がいない男の子では攻撃的行動が少なく、また「男らしさ」の表現がうまくいかないことがふつうよりも多いという。また、ビラー

(H. Biller) によれば、父親のいない男の子は母親との結びつきが強くなりすぎ、母親以外の人々との人間関係をつくりにくくしているという。さらに、ミアルーによれば、時間や約束を守れない、自己管理能力に問題がある子に、父親がいない子が多かったという。

父親がいないことと非行との関係については、アンダーソン(Anderson, L) の研究は眼をひく。それによると、少年院で生活している男の子たちでは、幼年期に父親がいなかったというものの頻度がきわめて高かった。また、父親がなくても非行におちいらなかった男の子については、4歳から7歳のあいだに父親代りになる人がいたケースがきわめて多かったということである。父親代りになる人については、別にビラーらの研究がある。それによると、父親のいない子にとっては、兄、伯(叔)父、祖父、男性教師、映画やテレビのヒーロー、小説やマンガのヒーロー、スポーツ選手、男友だちなどの存在がとくに重要な意味をもつ。

父親がいないことが子どもの道徳性におよぼす影響については、女の子は男の子より影響が少ないとする資料がいくつかみられる。しいて影響ありとする例をあげれば、ゴードン(Gordon) の研究がある。父親のいない女の子の場合、ふつう以上の攻撃的態度を示すことがある。父親がいないことが、少女に永続的な欲求不満をもたらすためと考えられる。

女の子への影響は、道徳性よりもむしろ人間関係の側面で見られる。ヘザリングトン(E. Hetherington) は、父親がいなくなったのが5歳前だった女の子の場合、その子が長じた時、異性とのつきあいで比較的困難が生じやすい事実を挙げている。これには、幼年期に男性と女性の意味ある関係を観察する機会が少なかったり、母親の過保護な養育態度が影響しているとおもわれる。

さて、母子家庭の母親は、子どものパーソナリティ形成上、父親がいないことの障害をどのように克服しているだろうか。これには、経験的に三つの場合が分けられよう。

第一は、母親が、現実の父親がいないことによる不明瞭な父親像を意識的に補修する場合である。母親は、子どもの父親のイメージを語り、傍証として、父親の記念写真や賞状などを開示する。そこには何がしかの程度で虚像の部分が含まれるのがふつうである。子どものためにつくられた父親のイメージは、励ます父親、期待をかける父親として、子どもに道徳的規範を与える。一方、たとえば離別した母親の場合、まれに、父親の価値を否定的に子どもに語ることもある。そうすることで、母子家庭の由来における母親の立場を正当化し、子どもには、父親を反面教師として、自己を律して生きることを期待しようとする。

策二は、父親代りをさがす場合である。しかし、現実にはつぎのようなむずかしさがともなうことがある。20代、30代で母子家庭となって若い子どもをかかえる母親の場合、実際、成熟した性の魅力に富んでいることも多いのであろう。そんな時、当の母親は、働きざかりの親戚・知人の男性の親身の援助に対して、感謝と警戒の入り混じった気持ちをもつことは容易に推察できる。このような事態では、公的あるいは半ば公的な立場にいる男性（たとえば、男性の民主委員・母子相談員社会教育指導員……）が一定の組織を背景に、暫定的にせよ、父親の代役を果す社会的工夫が望まれるところである。

第三は、母親自らが、父親の役割を果そうとする場合である。母親は、たとえば、通例父親の主要な役割となっている、種々の行いの審判者、悪い行いの懲罰者の役割、力仕事の役割をすすんで果そうとする。

わたしは、2年ほど前、母子問題の調査の過程で、運転手だった父親を交通事故で失った母子家庭を訪問したことがある。家族構成は、6歳、2歳の男の子と28歳の母親の3人だった。母親は保険の外務員をしながら生計をたてている。父親の死後しばらく、父親の仕事仲間だった人や友人だったという人から援助の申し出もあったが、いろいろ考えて、

結局それを丁重に断わったという。いまは、日曜日には、近くの原っぱで、かつて父親がやっていたボール投げなど、すすんで子どもの相手をしているという。近所の子がその父親と一緒に外で遊んでいるのを長男がみえるときなど、母親の眼からみると、長男の気持ちしがしむようすがよくわかる、とも話す。6歳の長男は、テレビをみていて、家族団らんのシーンがあると、視線をあらぬ方向に向けてしまうことがある、ともいう。

わたしは、母親とのインタビューの全体をとおして、彼女の育児にかける覚悟がなみなみならぬものであることを実感としてもらった。しかし一方で母親の懸命な努力にもかかわらず、やはり「父親」の役割の相対的弱さが感じられてならなかった。

「父親」の役割が遠のいている背景には、母子家庭の母親に対する貞操の過度な期待、母親が目だたずにけなげに生きることへの賞賛など、伝統的な価値意識が隠然と働いているということがあるのではなからうか。

父親代り（一人または複数）を、近隣、地域の幅広い人的資源のなかでえることは、ことのほかむずかしいようである。

かつての拡大家族制度のもとでは、父親の代役をつとめることができる人が家族内にもたいていた。しかし、こんにち多くみられる核家族的構成のもとでは、父親がいない場合、父親と機能的等価な人々を見つけるには、母親自身と、彼女に助力する地域の人々の双方による、旧習からぬけ出し新しい人間関係をつくろうとする意図的な努力が必要である。

オーストラリアの原住民のあいだでは、「父親」と呼ばれる人々の範囲がかなり広くに及んでいるという。自分を生んだ男親だけを、「父親」と称するのではなく、種族の一定のルールのもとで、もしかしたら自分の母親と結婚したかも知れない他の男性すべてを「父親」と呼ぶのだという⁽¹⁵⁾。この一例から示唆されるように、「父親」の存在は、より社会化されるのである。

母子家庭（および父子家庭）は、しばしば

欠損家庭 (broken family) と呼ばれるが、近年の「未婚の母」の出現 (全国で約1万5千人と推計) を考えると、母子家庭は必ずしも「欠損」しているとはいいがたい。二人親家庭 (two-parent family) がパーフェクトで、ひとり親家庭 (one-parent family) がブロークンであるというなら、「未婚の母」とその子の家庭は、もともと欠損していたといわなければならなくなる。

このような現状では、父親は本来あるべきものであるという立場をすてて、もともと父親をもたない家庭を念頭において、子どものパーソナリティ形成の理論を組み立てる試みも必要となろう。

父親研究で著名なベンソン (L. Benson) は、「子どもはすべて両親と一緒に暮らすのが望ましい。両親のいずれかが欠けていることは子どもの人格に悪影響をおよぼすと考えられる」という⁽¹⁾。しかし一方、現実には、未婚の母や離婚した人の増加により、母子家庭の数は増える傾向にある。数の上でも看過しえない母子家庭は、二人親家庭とならんで、家族の一基本形態である。(父子家庭については、ここではふれないことにする)。いま、だいじなことは、母子家庭に対する否定的な価値判断を排して、子どものパーソナリティ形成におよぼす「父親」の機能が何であるかの科学的、実証的知見を収集し、その「父親」の機能を、地域社会の人的資源のどこに期待すべきかを考え、そのための地域計画の工夫をはかることであるようにおもわれる。

注

- (1) M. E. ラム編著 久米 稔訳
『父親の役割—乳幼児発達とのかかわり』
家政教育社, 1981.
- (2) 本田時雄ほか『現代社会の人間形成』
福村出版, 1980. 64ページ.
- (3) M. E. ラム編著『前掲書』315ページ.

- (4) T・パーソンズ, R. F. ベールズ, 橋爪
貞雄他訳
『家族(核家族と子どもの社会化)』
黎明書房, 1981.
- (5) M. E. ラム編著『前掲書』168ページ~
169ページ.
- (6) 『フロイト著作集6』人文書院
「自我と超自我 (自我理想)」276ページ~
284ページ.
- (7) 『フロイト著作集5』人文書院, 1969年
「性欲論三篇, III思春期における変態」
81ページ
- (8) 『フロイト著作集6』(自我と超自我
(自我理想)) 280ページ~281ページ
- (9) 『フロイト著作集3』人文書院
1969年, 「トーテムとタブー, IIタブーと感
情のアンビヴァレンツ」205ページ.
- (10) T・パーソンズ他『前掲書』
- (11) 『フロイト著作集5』「子供のうその二例」
367ページ.
- (12) 『フロイト著作集5』「子供のうその二例」
370ページ.
- (13) M. E. ラム編著『前掲書』
- (14) M. E. ラム編著『前掲書』
- (15) 『フロイト著作集3』「トーテムとタブー,
I 近親性交忘避」154~155ページ.
- (16) L. ベンソン, 萩原元昭訳『父親の社会学』
協同出版, 1973年, 320ページ.

